

伝統行事を学ぶ

西仙北中で大綱講演会



講演する今野会長



真剣に聞く生徒達

国指定重要無形民俗文化財「刈和野の大綱引き」について学ぶ講演会が1月28日、西仙北中学校で行われた。1年生46人が大綱引きの歴史や綱が出来るまでの過程などを学んだ。

500年以上の歴史がある「刈和野の大綱引き」は、上町（二日町）の雄綱と下町（五日町）の雌綱をつなぎ合わせて刈和野地区の中心部、通称「大町通り」で町を二分して引き合う伝統行事。今年は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止と

なっている。講師は刈和野大綱引保存会の今野幸宏会長と行事の実質的な実施責任者である建元の戸島英明さん（二日町）、高橋信さん（五日町）の2人。

今野会長は刈和野の大綱引きの歴史について「室町時代からの伝承で500有余年続いているといわれている」と紹介。綱を作る際の苦労については「人口減少や農業の近代化などにより綱引きで使うワラの調達も一苦労。この行事を受け継ぐ後継者不足も課題などと話した。

建元の2人はミニチュアを使って縄のないう方や雄綱と雌綱の結び方などを実演した。雄綱の先端部分「ケン」を雌綱の先端部分「サバグチ」に挿入し、両方から引き合うと結び目が固く締まる「蛇口結び」。綱引き当日は危険な作業であるため、あまり近くでは見ることが出来ないため、子ども達も真剣に見入っていた。

講演後、生徒からは「どうしてこんな大きい綱で綱引きをしているのか」、「勝負はどうやって決めるのか」などの質問があり、今野会長は「昔はこまどと建元が判断している」と答えた。



蛇口結びを披露



縄のない方を説明する建元

化して今の太さになった」、「それぞれ150センチほど引張られる」と建元が判断している

来られるということ、講演を聞いてきました。今回の講演は「非工業都市がこれから発展する理由」。100年ほどの単位では工業都市の成長は大きく、国として一定程度維持することは大切でしたが、地域単位でみれば、300年、500年と繁栄する都市は、工業都市ではないといった内容のもので、日本側ばかりが目ざされてきた近代・現代ですが、これからは非工業都市のほうがある、これ打ち手があります。というもの。つまり、日本海側、秋田は何かを仕掛けるにはモッテコイの場所ということ。話は「まちづくり（資産運用）」であるということから始まりました。日本だと「まちづくり」は、政策の動向待ちのところが強く、「みんなのため」だとか美しく掲げられたりしています

むかい風

最初動いたのは、政策ではなく、地権者達です。地権者達が率先して協力し、お金をかけて、まちづくりを始めて、まちづくりを良くなっていく市街地の価値が上がり、人が生活しなくなり、固定資産税などで行政も潤います。そこへさらに再生活性化系の政策がやってくる。官民揃って稼げるまちづくりの回し方が大事です。

（久保田健一郎）

行事である刈和野の大綱引きをより詳しく知ってもらおうと開催している。